

Photographer's gay father and twin boys.

写真家のゲイの父親と双子の息子

Interviewee

Mr. Bart Heynen

Q. 自己紹介をお願いいたします。

現在、ニューヨークを拠点に活動しているが、もともとはベルギー出身。同じくベルギー出身のロブ・ヘイヴァートと結婚している。10歳になる双子の息子、イーサンとノアは、カリフォルニアで代理出産と卵子提供によって生まれた。カリフォルニアの代理出産のエージェントが医療、法律、ロジステックなど総合的なサポートをしてくれた。卵子ドナーは別の会社で選んだ。全体的にプロフェッショナルで、サプライズもなく、ポジティブな経験だった。

バートもロブもビザをとってアメリカに住んでいるが、子供たちは2人ともアメリカとベルギーの二重国籍だ。

Q. 代理出産で親になるまでについて教えてください。

自分と夫は、14年前に結婚した。二人はずっと子供が欲しいと思っていたが、当初はゲイカップルである自分達には現実的ではないと思い、代理出産や卵子提供について何も知らなかった。しかし、エルトン・ジョンが利用した代理出産センター(CSP; Center for Surrogate Parenting)のことを知り、興味を持った。その頃、家族を持つ準備ができていたので(バート40歳、ロブ44歳)、CSPに電話をかけ

ると、親切に説明してくれた。CSPは、この業界で30年近い経験を持っていた。

代理出産の手続きはかなり早く済むと知り、驚いた。ベルギーでの養子縁組も検討したが、非常に難しい手続きで何年もかかるという。二人とも、家族をつくるという展望に胸を躍らせた。ロブはどうしても実の息子を欲しがり、バートもその思いを認めて支持していたので、誰が実の父親になるかということでは一致していた。多くのカップルは、一人ずつ実子を持つことを選択するが、自分たちはそうしなかった。「あなたの子」「私の子」というようなことを避けるために、ロブに実の父親になってもらいたかった。今となっては、生物学的なつながりは関係ないと思っている。というのも、自分は子どもたちのことを強く思っているから。しかし、当時は、起こりうる問題を避けたかった。

CSPは代理母の重要性を強調する。代理母は子供を身ごもるが、地理的に遠く離れていることも多いので、妊娠中は毎週電話をかけることや、まずは直接会ってから手続きをすることを薦めた。CSPを通して代理母を紹介された。彼女は代理出産の経験があり、健康的で、代理出産で人を助けるのが好きな人だったので、とても安心した。3つの卵子が代理母に移植され、2人の子供が生まれた。

CSPは、営業や金銭などの問題を避けるために、卵子ドナー候補に会ったり、面接したりすることを望まなかった。ドナーを選ぶために経歴書や病歴書などが提供された。最初、別の卵子ドナーを選んだが、彼女は実子をゲイカップルに育てられたくないという理由で、依頼を断った。自分たちが同性愛者であることをすぐに公表してよかったと思った。そして、次のドナーを選んだところ、自己紹介の手紙を受け取ったとき、彼女はとて



も喜んで、「イエス」と言ってくれた。一度だけ卵子ドナーと会うことができたが、それはプロセスが始まり、代理母が妊娠した後だった。彼女との対面は楽しかった。彼女の両親もベルギー出身で、偶然とはいえ、嬉しい出会いだと感じた。子供の実の母親であるドナーに会うのに緊張していた。CSPは、子供たちが将来、成人した時に会える可能性があるので、一緒に写真を撮っておくように勧めた。

カリフォルニアの法律で、自分たちは息子たちが生まれる前から法律上の親として認められており、これは大きなメリットだった。

自分たちにとって代理出産のコストは制約ではなかったが、他の多くの人々にとってはそうだろう。ネブラスカ州で、代理出産をする経済的余裕のない一家に出会った。一方の男性の母親が代理母になり、もう一人の男性の妹が卵子を提供した。このような特殊な状況だったが、彼らはとても愛情深い家族だった。経済的な制約を克服するために、創造的な解決策を見いだしたのだ。

Q. ゲイカップル/ゲイ男性の間で、代理出産で親になることは、どのような位置を占めていますか？ マイノリティでしょうか。特権的でしょうか？

現在、ニューヨークやカリフォルニアを中心に、ベビーブームが起きている。年々、ゲイの親が増えている。もともとレズビアン親はトラブルが少なかったが、今はゲイのカップルも家族を持つようになった。子供を持つことへの人々のモチベーションは非常に高い。子供を作るには5~6万ドルかかるが、欲しいという気持ちがあるなら、実行すればいい。養子縁組を選ぶ人もいる。

遺伝的な要素が動機になるかどうかは、その家族によって異なる。養子よりも遺伝的につながった子供を望む人の方が多いが、それは未知の世界を恐れているから。しかし、遺伝上の子供であっても、未知の世界に足を踏み入れることに変わりはない。

Q. 代理母との関係性で予想外だったこと、心配だったこと、うれしかったこと、難しかったことなど。

最初の頃、代理母に大きな借りがあるように感じていて、感謝の気持ちばかりが先走り、なかなか関係を築くことができなかった。それでも、それを乗り越えて、お互いに愛を分かち合う関係だと考えるようになった。時間はかかったが、旅の終わりには自分とパートナーは代理母と一緒に分娩室にいた。病院で代理母と同じ部屋にいたので、医師から夫婦と間違われることもあった。とても親密な関係になっていたのだ。

代理母は、赤ちゃんを無事に身ごもったこと、そして、子供を引き渡せたことに喜びを感じていた(彼女には3人の子供がいた)。

主な心配事といえば、卵子ドナーに関するものだった。例えば、「正しい」ドナーをどうやって選ぶか、など。ドナーのプロフィールはとても人間味のないもので、知らない人だから、怖いという気持ちが生じた。しかしそれでも、卵子ドナーが見つかったことは、とても幸運だった。

Q. 子育てで大変なことは何ですか。子育てをしていて嬉しいのはどんな時ですか。手伝ってくれる人はいますか。分担はどのようになっていますか。



異性カップルの場合と比べてゲイの親の場合、違いがある。

子供たちが生まれたとき、夫は仕事を続け、自分は仕事から離れ、家にいることにした。双子を授かったことで、最初の数カ月はとても大変だった。自分が家にいる男性であること、そして誰もが突然、自分のことを「女性の役割」を担っていると考えようになっただけに対処しなければならなかった。子供の世話をする女性はどこにでもいるが、子供の世話をする父親はいないので、ロールモデルを失ったと感じた。ちょっと脱男性化したような気がして、居心地が悪かった。結局、みんな異性愛の親に育てられたので、自分のジェンダーを無視しなくてもいいロールモデルを探しているのだろう。自分は男らしく、そう見られたいと感じている。子育ての役割に少しずれを感じていたのだ。これが、ゲイの家族を撮影し、本を作り始めた理由の一つだった。

息子たちは11歳になり、家族として円満に過ごしている。振り返ると、自分の母親は子育ての大きなお手本になっている。母親から学んだ多くのツールを使っている。

息子たちと一緒に朝食をとるときが一番幸せな時間だ。会話が弾むので、食事が一番やりがいがある。ヨーロッパの伝統的な朝食を食べると、子供たちはとてもおしゃべりになる。例えば、今朝はブーチンの話で盛り上がり、その問題を解決するために、息子たちはとんでもないアイデアを思いついた。子供たちと大人顔負けの会話ができることが気に入っている。息子たちが自分を親として本当に必要としていると感じる時、彼らに安心できる場所を与えられることが嬉しい。

Q. masculinities と子供の世話をすることは、矛盾しますか？ 他の Gay Dads にとってはどうですか？

今は息子たちが少し大きくなったので、矛盾は感じない。ニューヨークではナニー(乳母)がたくさんいるので、結局、赤ちゃんは女性の腕に抱かれることになる。最初、自分はそういう役割だった。

ニューヨークでは、初対面の人にまず「あなたは何をしていますか」と聞く。赤ちゃんの世話をする人の価値はどこか低く、この高学歴のキャリア志向の世界では劣っているとみなされる。自分が写真撮影したゲイの家庭では、乳母のいる家庭としない家庭が半々だった。お手伝いがある人もいれば、完全に自分たちでやるという人もいた。

両親が男性だと、伝統的な性別の役割が溶けて、平等になることがある。ジェンダー役割が交換可能であるのはよいことだ。

Q. 子供に対して、代理母や卵子ドナーのことについてどのように話してきましたか？ 子供は、父親二人の家族構成であることに、納得していますか？

子供が生まれた後、2年間ベルギーに移住した。子供たちをベルギーで自分の子供として認めてもらうための手続きをしなければならなかった。最終的には、アメリカでは息子たちの法的な父親であるにもかかわらず、ベルギーでは養子縁組をしなければならなかった。そのため、1週間の養子縁組コースに参加することになった。コースで最初に言われるのは、家族が作られた経緯についてできるだけオープンにすること。もし、何か嘘について、後で子供がそれを知ったら、とても傷つくことになる。そのため、自分たちは、息子たちが質問してきたら、必ず



オープンにするように心がけていた。息子たちが質問したときには、必ず率直に答えるようにしていた。ビジュアルでわかりやすく説明した。決して大げさなことにせず、秘密にもしなかった。

子どもたちは、他のゲイの父親にも見てほしいという思いから、自分が作ったゲイの家族についての本に協力してくれている。一般的にニューヨークでは、ポリティカル・コレクトネス(政治的正しさ)に大きな焦点が当てられている。また、息子たちの学校には同じような家庭の子供がいて、学校はとても寛容だ。最近の子どもたちは、多くのゲイと出会っていて、恥ずかしいと思うことがない。古い世代とはまったく違っている。彼らがアメリカの中部あたりで育っていたら、あるいはベルギーで育っていたら、おそらくかなり違っていただろう。

Q. 子供にとって、代理母や卵子ドナーはどのような存在ですか？ 特別な存在？ 遠い親戚のような？ それほど関心がない？

家では、卵子ドナーのことをミキ、代理母のことをレベッカと呼んでいる。彼女たちの写真は書斎にある。

今のところ、子供たちは、卵子ドナーにも代理母にも特に興味はないようだ。

Q. 遺伝的親ではないということは、家族内の立場で脆弱性を意味しますか？ どのように対処していますか？

自分の方が子供たちと過ごす時間がとても長いので、実際には逆だ。遺伝上の親でないことの良い点は、子供たちの弱さに寛容になる傾向があるので、プレッシャーが少ない。距離を置いて物事をとらえることができる。


Q. 親とは？ (伝統的)父性や母性についてどのように考えますか？

親というのは、性別や性的指向に関係なく、子供の若い時期を導く人のこと。最初のうちは、それがとても大変かもしれない。しかし、親として大切なのは、その子のありのままを受け入れること。子どもは生まれたときからすでにその人なのだから。その子をそのまま受け止め、愛し、導き、経験を共有し、その子とその人らしくなるように手助けをしなければならない。

伝統的なロールモデルには、多くの期待が込められている。そのような高い期待を持ち、それを子どもに押し付けようとする人がいることを好ましく思っていない。オープンになって、子供自身の興味を刺激しようとするなら、子供の気質に逆らう代わりに重要な戦いに勝利したことになる。あまり型にはめようとしないうほうが良いと考えている。その子の個性に合わせ、育て方を変えていかなければならない。例えば、息子のイーサンは学習障害があり、そのことが多くのことを教えてくれた。イーサンは、普通の子供とは違う。イーサンが通っている学校は、視覚的な学習が多く、自分の感情を率直に表現するところなので、イーサンは他の子よりずっと上手に自分を表現することができる。

Q. 家族の定義や範囲について教えてください。代理母や卵子ドナーに子どもがいたら、そのような人も家族や親戚にカウントされますか？

代理母や卵子ドナーは家族の一員ではない。もしかしたら、後年、子どもたちが彼女らに会って友達になるかもしれないが、今のところ、彼女たちを取り込も



うとすると混乱しすぎると考えている。卵子ドナーはそれを望んでいない。

バートとロブは代理母と時折、連絡を取り合っている。しかし、それほど親しい関係ではない。彼女は現在、ネブラスカに住んでいる。

Q. 代理出産について、代理母の搾取だという批判もあります。このことについて、意識しましたか？

家族を作ろうと考えたとき、この問題をあまり考慮しなかった。ベルギーでは商業的な代理出産は合法ではない。強制されない限り、すべての女性が自分で選択することができ、それに応じてサポートされ、報われるべきだと考えている。もちろん、保険にも加入しなければならない。専門機関を通せば、こうした面はすべてカバーされる。ウクライナやインドのような国では、非常に搾取的であり、これは受け入れがたいことだ。しかし、アメリカでは女性の選択であり、強い枠組みがある。

代理出産は非倫理的だという批判があるが、そうは思わない。当事者たちが精神的に健康で、自分が何をしようとしているのかを十分に理解しているのであれば、それは当事者たちの自由。もし、各国が国民にもっと多くの選択肢を与えることを考慮できれば、利点があるはずだ。しかし、アメリカは現在、この点で後退している可能性がある。

一番大きな要因はお金。ウクライナで代理出産をした人を知っているが、価格はアメリカより30%ほど安いだけ。エージェントの専門性などにはアメリカとウクライナでは大きな差がある。だからこの選択の理由はお金しかない。

Q. ニューヨークに居住されていますが、この地域では、ゲイカップルの代理出産依頼や子育てに対してどの程度理解がありますか。マイクロアグレッションはありますか。

ニューヨークでマイクロアグレッションを経験したことがない。それどころか、ここではとても歓迎されていると感じている。ベルギーでも差別を受けたことはない。

成熟した職業人なので、ゲイだからと言ってあまり差別された経験がない。夫はウォール街でかなり著名な人物で、いつも自分を夫として紹介してくれる。最初は少し驚くかもしれないが、それだけ。

子供たちがまだ小さかった頃、イギリスに旅行したとき、国境でたくさんの書類を見せなければならなかった。当時はとても差別されていると感じたが、今は状況が変わっているのではないと思う。

Q. 代理出産で親になろうとするゲイカップルに対してどのようなアドバイスがありますか。

1. 親になることは大変なことなので、賢明に検討しなければならない。
2. 経験豊富で、医学的、法的な枠組みを提供でき、代理出産候補者を多く抱えているエージェントを探すこと。エージェントに対して信頼がおけるかどうか重要。自分でやろうとした人が苦労したという話をよく聞く。
3. 自分なら友人に代理出産を依頼することはないと思う。そういうことをしたらもっと複雑になるから。明確な境界線があるプロフェッショナルな取り決めによって、距離を置く方がずっと簡単。その場合、代理母の医療費に加え、毎月の支払いがあった。また、弁護士費用やエージェントの手数料も負



担した。それは透明で明確なプロセスだった。

Q. その他。

今、カメラマンとして仕事に復帰している。必要なときはナニーに手伝ってもらうが、それ以外は自分と夫ですべてをこなしている。

(2022年10月)

Mr. Bart Heynen [Link](#)

ベルギー出身、フリーランスの写真家である。現在は夫と10歳になる双子の男の子とニューヨークに暮らす。カリフォルニアで代理出産と卵子提供により、42歳で双子の男の子の父親となった。

2021年には、2016年から4年間にわたってアメリカ中のゲイの父親像を記録した写真集『Dads』を出版した。

写真集：

[Bart Heynen 2021 『Dads』](#)

関連記事：

[仕事・家事・育児、性別でなく“性格”で。ジェンダーロールを持たない父と父の、あり方もやり方もそれぞれの家族生活 | HEAPS \(heapsmag.com\)](#)

[Bart Heynen \(@bartheynen\) • Instagram](#)

[Bart Heynen's New Book 'Dads' Shows the Nuances of Gay Fatherhood \(wmagazine.com\)](#)

['Dads': A new photobook celebrates gay fathers with their families across America - CNN Style](#)

['A Family Like Ours': Portraits of Gay Fatherhood - The New York Times \(nytimes.com\)](#)